

6 外陰の炎症性疾患に対する 漢方治療の2症例

二宮レディースクリニック
二宮 典子、鎌田 良子

【症例】

症例1は52歳女性。性交後の疼痛と出血を主訴に他院の皮膚科および婦人科を受診したところ、初期治療にステロイド外用薬を処方され、外陰塗布を継続していた。3ヶ月治療を継続したが、外陰の疼痛症状は増悪したため当院を受診。受診時の外陰所見は、大陰唇・小陰唇・肛門周囲に及ぶ広範な発赤、びらん、浸出液を認めた。越婢加朮湯と抗アレルギー薬の内服、亜鉛華軟膏とアズノール軟膏の外用により2週間で掻痒感、びらん、浸出液が消失し治癒に至った。

症例2は62歳女性。GSMに対する外陰部高周波治療および腔レーザーにて定期的に治療を数回行い経過良好となっていた女性に対し、メンテナンスのために外陰部高周波治療および腔レーザーを行った。治療翌日より、頻尿症状が出現。腔周囲組織の熱による浮腫・炎症性変化と判断し、越婢加朮湯を投与したところ症状の改善を認めた。

【考察】

越婢加朮湯は、石膏、麻黄、蒼朮、大棗、甘草、生姜から構成される方剤である。石膏は清熱作用により炎症を抑制し、麻黄は発汗・利水作用により浮腫を改善する。蒼朮は利水作用と共に祛湿作用を有し、過剰な水分・分泌物を除去する効果がある。生姜は温熱作用により血行を改善し、大棗・甘草は調和作用により他の生薬の働きを補助する。

本方剤は、漢方医学的には「熱証」かつ「水毒」の病態に使用される。症例1では外陰部の発赤・炎症(熱証)と浸出液(水毒)、症例2では熱による組織の炎症(熱証)と浮腫(水毒)という病態を呈しており、越婢加朮湯の薬理作用が奏効したと考えられる。

通常、関節炎や蕁麻疹などに用いられる越婢加朮湯であるが、外陰部における炎症性変化に対しても、その清熱・利水作用により症状の改善が期待できる。特に、ステロイド外用薬が無効または増悪する症例において、新たな治療選択肢となる可能性がある。

【結語】

越婢加朮湯は、外陰部の炎症性疾患に対して有効性が期待される漢方薬であり、特に浮腫や分泌物を伴う症例において良好な治療効果が得られる可能性が示唆された。今後さらなる症例の蓄積により、その有効性と適応について検討を重ねる必要がある。